Phonetic Society of Japan

音声研究　第6巻第1号
2002(平成14)年4月
44-52頁

Journal of the Phonetic Society
of Japan, Vol.6 No.1
April 2002, pp.44–52

日本漢語の史的音韻論的課題

高　山　知　明*

Some Issues in Historical Phonology of Sino-Japanese

TAKAYAMA Tomoaki*

SUMMARY: The aim of this article is to emphasize the necessity for further investigation into the relationship between Sino-Japanese and Yamato, and to present a couple of topics on the historical phonology of Japanese. One of the main questions that deserves to be challenged is how the indigenous structure extended to SJ word formation, such as geminations, of which the earlier stage can be hardly attested by historical records. Another topic concerns vowel coalescence. The interesting interaction between SJ word types and Yamato accounts for these sound changes.

キーワード：漢語，和語，促音化，ハ行子音，両唇音，長母音化，母音融合

1. 趣旨

漢語借用の問題を考える上で不可欠の視点は，和語との関わりをいかに考えるかという点である。従来も，そのような視点を欠く研究は実質的に成り立ち得なかったであろうが，今後いっそう，その重要性は増すと考えられる。とくに，和語と漢語とのそれぞれの現象がたがいにどのように係わり合い，語彙内において，両者がどのような関係に立つのかについて残された課題は少なくない。本稿では，二つの具体的事例，(1)「漢語形態素の複合に伴う促音化」(2)「日本語の史的変化と漢語」を通して，今後の研究の可能性を探ることにする。その前提として，最初に序節を設け，借用語音韻論としての漢語研究の基本的な立場を示す。本稿は性格上，一定の結論を出すことよりも，問題点の提示を行なう点に主眼を置いている。また，表題のように史的音韻論に関する話題を中心とする。

* 金沢大学文学部助教授 (Associate Professor, Faculty of letters, Kanazawa University)

2. 序節

まず初めに，借用語音韻論のテーマの下，日本語における漢語を研究対象に選ぶ場合，次のような問題があることを認識しなければならない。従来，関連分野として主要な役割を果たしてきたのは漢字音研究である。その主な文献資料は漢籍や仏典であるが，それらが漢語の現実の実態をどの程度反映しているのかに大きな問題がある。すなわち，それらに見えるのは，学習対象としての字音，あるいは特殊な目的のために特化された字音であり，資料における変遷過程をそのまま，言語史的な意味での歴史と見なすことができないからである。このことはしばしば指摘されるところであるが，要は，その具体的な問題の所在をどのように捉えるかであろう。

いま，和語に取り込まれた漢語起源の「キク(菊)」「トウジミ(燈心)」のような例は除くとしても，古代国家の形成とともに，漢語が日本に大量に入ってくると，行政用語や宗教用語を中心に，それを日本語の口頭文脈中において使う機会が増えていったと想定される。その場合の漢語の発音はどのようなものであったのだろうか。たとえ，その話し手が，原音の知識を備えたエリート層であったとし

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

ても，書記言語としての漢文脈に直接支配されない局面では，正格の発音に拘らなかったものと考えられる。今日，英語らしい発音がそれなりにできる人であったとしても，日本語文脈中の英単語（外来語）まで英語風に発音することはなく，日本語により融和した形を選んで，聞き手に対している。反面，外国語を学ぶ時には，母語の干渉から所詮は逃れられないにしても，なるだけ日本語的にならないよう発音に心がけるはずである。

おそらく，そのような場面による使い分けは，長い年月を経て徐々に出来上がっていったものではなく，すでに借用時の早い段階から自然に行なわれていたにちがいない。このことは，たとえば，8世紀を中心に，標準的な中国語音として取り入れられた漢音についても例外でなかったと考えられる。残念ながら，そのような言語的側面が文献に顕れることは期待しにくく，とくに古い時期になればそれだけ，研究を推し進める上での障害も大きい。しかしながら，そのような空白をいかに補っていくかという視点なくしては，日本漢語に関しての借用語音韻論は成立しえない。

これまでの漢字音研究の成果を踏まえつつも，上に指摘したような借用漢語層の存在を想定しながら研究を進めていく必要がある。その際，和語との関係が重要な観点となる。こうした漢語層の具体化には相当な困難が伴うとしても，けっして無意味な仮構ではない。

3. 漢語の促音化

本節では，「仏法」「一体」「学校」「実相」等のような，漢語形態素の複合に伴う促音化の問題を取り上げる。

3.1 漢語におけるpと促音化形

ハ行子音の変化に対する見方が，ここ十年ほどの間に大きく変わってきている。その点を踏まえ，ハ行子音の変化以前における漢語層がどのような状態にあったかを考える。

古代語における促音の実態がどのようであったかを直接知る手掛りは乏しい。そのような時期にあって，漢語の促音化の実態についても，直接的な証拠があるわけではない。そのため，間接的な推定に依らなければならず，ハ行子音の変化は，その場合の重要な指標と考えられてきている。

ハ行子音の変化は，従来の見方によれば，おおよそ12世紀頃までに次の①②の順に生じたとされる。

①摩擦音化　p > ϕ
②母音間での接近音化　ϕ > w / V_V

よく知られるように，遡ればハ行子音が破裂音pであったことが清濁の対立を手がかりに再構され得るわけであるが，pの段階にあった具体的な年代となると，決定的な証拠に欠けるため，文献時代以前とする立場から平安初期に引き下げる立場まで，推定に大きな幅がある（具体的な各文献は木田1989を参照）。

たとえば，濱田(1954)は，和語の「モッパラ（<モハラ）」「アッパレ（<アハレ）」「イッパ（<言ふは）」の促音が平安初期から中期頃までの間に現れたとすれば，それらは[ϕϕ]であるはずで，その後に[pp]に移行したとする。このような推定がなされる背景には，当然，①の摩擦音化を「上代奈良朝」以前とする見方が関わっている。

ところが，①と②の現象を根本的に見直す解釈が提出されている(林1992)。すなわち，史的音韻論の常識に照らせば，①と②とは時期と原因を異にする独立した現象ではあり得ず，②の変化を導いたのは，他ならぬ①の推移であって，両者は切り離すことのできない一連の変化であると指摘されている（併せて，林(2001)は文献解釈をもとに，9世紀のハ行子音がpの段階にあることを論証する）。以下では，この線に従って漢語の問題を考えてみることにする。

もし，「モッパラ」のような語形がすでに存在していたとすると，その長いpは，①②の変化をすり抜けたと考えられる。たとえ母音間であっても，その閉鎖の持続時間ゆえに緩みが生じにくいとすれば，①②とは別に，③のプロセスを想定することが許される。

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

③ pp > pp /V_V [1)]

例えば，次のようなダブレットは，①②と③との経緯の違いを端的に示す事例となろう。

apare（アハレ）------ > (aΦare) > aware ---- 〈①②〉
↘ appare（アッパレ）----------〈③〉

さて，問題は，「アッパレ」「モッパラ」のような強調の場合とともに，③に漢語が加わっていたのかどうかである。今日の「一杯」「発砲」等に見られるようなh～pの交替を，歴史的に見れば①／③の分岐の反映であるとする見方は，もともと解釈として自然である（漢語形態素の頭位は②は生じず，厳密には③に手を加える必要がある）。とくに，①②の時期を林(1992)のように考えるとすると，ppが漢語層の中に存在し続けた可能性は決して低くない。併せて，当然，ハ行以外の他の促音化もすでに形成されていたことになる。それぞれ，具体的な語例を特定するのは難しいが，少なくとも，漢語促音化の雛型はすでに出来上がっていたと考えて無理がなさそうである。

現在，pが現れるのは促音化だけでなく，「近辺」「参拝」のような撥音/N/に後続する場合（[mp]）がある。これについても同じく推定を試みてみよう。

当時の実現も，もし[mp]であったとすれば，やはり両唇閉鎖の長い持続が，摩擦音化を阻んだと考えることができる。しかし，ここで問題となるのは，先行する漢語形態素の末尾鼻音が，いかなる状態にあったかである。字音資料に基けば，各字音の韻尾-m, -n の区別は，平安時代にあってはまだ保持されていたと言われている。これに対し，①の変化に先立つ早い時期に，すでにそのような識別にこだわらない層を想定しうるかどうかである。

11世紀後半の『金光明最勝王経音義』（古辞書音義集成）には，韻尾の-ŋ(-ũ)と-u, -mと-nのそれぞれの違いに注意する旨の指示が記されている。この種の注意が喚起されるのは，それらの習得に困難を伴なったからであろうが，ここで重要なのは，それを困難にした背景のほうである。すなわち，その背後には，和語を中心とする日本語の音配列が関わっている。母語の構造との齟齬ゆえに，鼻音韻尾の習得に意識的な学習が絶えず必要とされたのであろう。そうだとすれば，こうした状態はこの時期になって生じたものではなく，原則的には漢語移入の初期の段階から大きく変わっていないことが考えられる。後続子音の調音位置に逆行同化されて鼻音要素が実現されるような，その意味で今日の撥音と同じ状況を，早い時期の漢語に想定することはそれほど無理なことではない。ただし，これに関しては，そもそも連濁しない[mp]が存在したのかどうか，また，この連濁の問題が漢音，呉音のそれぞれとどう関わるのかをさらに論じる必要があるし，和語におけるいわゆるm音便，n音便に対しても見直す必要が生じるだろう。

以上のように考えると，促音化についても，鼻音韻尾後のpについても，序節に述べた初期の段階の漢語層を具体的に考えるうえで，重要な材料であることがわかる。その意味で，ハ行子音の捉え方がこの問題に大きく関わってくる。

一般音韻理論研究において，現代日本語を対象とする研究が増えるにつれ，重子音の場合にしかpが現れない（外来語とオノマトペアを除く）という分布も，よく言及されるようである。それに馴染んだ研究者から見れば，上に示した漢語形の想定は，ある意味で自明のことかもしれない。しかし，個別言語史研究においては，それがどこまで推定可能であるかに諸々の問題があることも無視することができない。

なお，これに関連して，現代日本語を扱った最適性理論(OT)研究で，しばしば目にする制約*P（単独の子音pを禁止する）について日本語音韻史の立場から触れたい。

この制約は，自然性が高いといわれる両唇音が，なぜ，言語の普遍性を反映するはずの一般制約で有標の扱いを受けるのかという点で，奇妙な存在である。むろん両唇破裂音に関しては，閉鎖を弱める変化を被りやすいとの議論も他方にあり（たとえばMartinet 1952, Ladefoged and Maddieson 1996. chap 2.），もともと一見矛盾する両面の主張がなされている。

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

そもそも史的現象が，子音の自然性をどの程度反映しうるのかという一般的な問題があるが，いまそれを直接問わないとしても，日本語の①摩擦音化 p > Φ が，p の有標性を反映する現象か否かは個別に問う必要がある。果たしてそのように言えるであろうか。

語頭に p を残したまま母音間で摩擦音化を生じたとする木田 (1989) や，さらに，小倉 (1998) のように，もともと摩擦音の傾向を帯びていた母音間のハ行子音が w 化し，語頭の p はその進行を待ってようやく摩擦音化し始めたとする見解さえ出されている。小倉論文は，サ行子音をも視野に入れており，日本語音韻史に関する限り，〈均斉のとれた音韻体系にあって p が（突然）閉鎖を緩め始めた〉とする単純な見方は通用しなくなってきている。両唇音の歴史的な振る舞いについては，他言語のケースをも含めた言語史類型論的な観点の導入も必要だろう。これらの問題は，一般制約としての *P についても無関係ではないと考える。また，OT の展開においても，Fukazawa, Kitahara, and Ota (2001) のように，他の制約によって *P の必要性が解消される可能性も示されている[2)]。いずれにしろ，日本語以外で *P がどうしても必要な他言語の例があるのかどうかも含め，類型論的観点は重要であろう。

3.2 促音化の偏在性と素性

まず最初に，漢語の促音化についての，二形態素間の音的条件を整理しておく。

《先行形態素の末子音 -C(V) ＋後続形態素の頭部子音 C-》

（「国家 koku + ka」の下線付の部分のみを示す，挿入母音は省く）

-p + p-	-t + p-	-k + p-
-p + t-	-t + t-	-k + t-
-p + k-	-t + k-	-k + k-
-p + s-	-t + s-	-k + s-

※史的過程を見る上での便宜も考え，原音 -p（唇内入声）に対応する類を p で代表させた。この p 類は，前述のハ行子音の変化によって -pu > (-wu) > -u となる場合と，促音化形の綴り字発音の定着で -t 類（−ツ）に合流した場合とがある（小松 1971. 第Ⅱ部 第六章）。

よく知られているように，現代語において，後続の無声子音の違いに左右されずに促音化を起こすのは，-t + の場合である（「失敗」「必着」「鉄鋼」「血栓」等）。これに対し，-k + の場合は「学会」のようにカ行子音が続くときには促音化しうるが，タ行，サ行，ハ行子音では例外（ハ行が後続する「北方」「100本」等，最近の例に「独法化」）を除いて促音化しない。

t 類と k 類との間にこのような偏りが生じた歴史的過程がどのようなものであったのかはそれほど明確でない。沼本（1997. 第五部）の字音調査例（11世紀〜）を見ても，k 類の促音化は後続がカ行の例がほとんどで，他の子音が続くのは若干例に過ぎないようである。同論文でも，カ行以外が後続する場合は生産性が乏しく（あるいは散発的？），最終的に淘汰されたのではないかと考えられている。

現代語の促音化を，最適性理論の枠組みにおいて説明した研究に那須 (1996) がある。この論文の最大の眼目は，同理論によって現象の包括的な説明が可能であることを示す点にあるが，いま問題の t 類と k 類の差に関して興味深いのは，t の素性 [coronal] に関する忠実性制約 IDENT-IO(cor) が，他の素性のそれ（この場合は k[dorsal] に関わる IDENT-IO (dor)）に対し，一貫して下位にランキングされていることである。すなわち，[coronal] の忠実性制約違反のほうがより軽く査定されるため，そのぶん [coronal] は入出力間において他の素性への変更が許容されやすい。つまり，促音化における先行末子音の t は，k に比べ，後続子音による逆行同化を受けることがより可能になっているという。

調音位置素性間のこの格差は，[coronal] に特別の地位を付与する，最適性理論以前からの流れを部分的にしろ引きついだもののようである（同論文参照）。いずれにせよ，[coronal] が他の素性に対してどのような位置を占めるのかという普遍的な特質が直接，促音化の現象に関わることに違いはない。今

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

後の理論展開のなかで，素性間の相対的な関係がどのように位置付けられるのか，k類とt類との促音化における非対称性が，その位置素性のあり方を反映するものなのか否かという問題は常に注意すべき点である。

残ったp類の促音化であるが，前述のハ行子音の変化がまさに絡んでくるため，歴史的な全体像の把握がやはり容易でないが，少なくとも，後続の子音はpだけに限られていなかったようである(沼本1997. 第五部)。この点でk類と異なるとすれば，それはどのように説明されるのだろうか。あるいは逆に，その不確かな実態を理論的にどのように予測し得るのかという問題が残されている。

また，促音化とは別に，t類の字音は，'taicut'「退屈」のようなキリシタンのローマ字綴から伺えるように，k類と異なって，かなり遅くまで短促的な舌内入声の特徴が保持されていたと言われている。現実の漢語において，そのような特徴がどこまで保たれていたのかは疑う必要があるが，字音としての規範性を維持していたことは確かであろう（現在は，謡曲や一部の宗派の仏典読誦といった特殊な場で伝承されているに過ぎない)。この種の現象には社会言語学的な要因がきわめて強く働いていると考えるが，そのような場合においても，素性[coronal]のあり方が反映されたと見てよいのか否か。すなわち，他ならぬt類が選択されたことが，普遍性の現れであるのかどうかという問題がある。

3.3 和語の音便と漢語の促音化

和語における促音のあり方が，漢語を日本語に取り込む際にどのように作用したかという問題は，借用語論にとってより本質的な問題であり，その解明の重要性も指摘されている(高松政雄1990)。すなわち，促音化の生じる箇所は形態素の接合部分であり，当然，和語の音便との関わりを無視することができないからである。しかし，その具体的な考察はそれほど進展していない。

例えば，次のような和語との違いは，この問題を考えるにあたっての，一つの重要な視点となるかもしれない。

和語：	促音便	イ音便，ウ音便
漢語：	促音化	×

「就キテ」や「白ク」のような和語のVki, Vkuに見られるイ音便，ウ音便が，漢語の形態素結合においては顕現することがない（これに関わる問題例に，「拍子」,「サウシ(＜冊子 サクシ？)」，また，複合に限らなければ「ゾウ（族)」があるが，それぞれ個別の事情を探る必要がある)。和語の音便の延長線上に漢語をおくとしたら，和語が持つ現象のどのような点に制限が加わり，あるいはまたどのような点が漢語に拡張されているのか，そして，それを決定しうる原理にどのようなものがあるかといった問題が考えられる。たとえば，これらの問題は，3.2に述べた，t類で促音化が安定的に起こり，k類が特定の条件に限られていることとどう関係するのか。

動詞連用形の促音便に関して言えば，その環境は，「～て」「～た(り)」のようにいずれも後続するのはタ行子音である。これに対して，漢語t類の促音化は，後続する無声子音の種類を問わない。

ローレンス(1999)は，現代語において，外来語やオノマトペアにしか現れないと言われて来た/Qh/が，実際には「十針（ジ(ュ)ッハリ)」や「絶不調(ゼッフチョウ)」「まっ半分」等のように複合に現れうることを指摘している。これらは，限定的な条件のもとで生じた形であるが，それを生み出しているのは本来，日本語が持っている基本構造であることを論じている。いま問題の漢語の促音化についても，たとえ和語に見かけ上は表われない現象であっても，当時の日本語が持っている潜在力が引き出された可能性を考える必要がある。

ただし，和語の「音便」の側にも大きな問題がある。一口に音便と言っても，その内容は，種々雑多な事例の寄せ集めから成り立っている。要するに，音便とは，音節CVに生じた何らかの変容を事実上すべて含みうる，明確な言語学的概念規定を持たない謂いだからである。たとえば，動詞の連用形音便と，形容詞の連用形音便（「うつくしう」のようなウ音便）とでは条件が異なるし，さらに，個々に発生した例となると多種多様である。和語の音便との関

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

わりを考えると言っても，これらの現象の取り扱い自体を再考しながら進めなければならない。

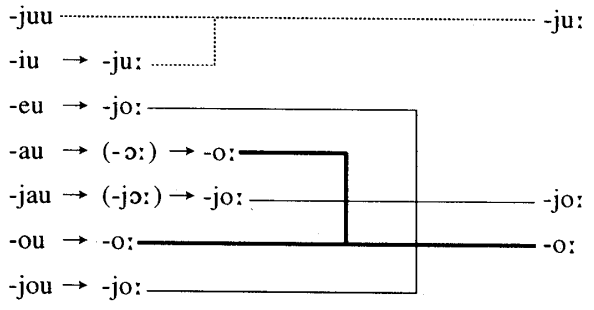
漢語の促音化については，方言によっては濁子音の前でも起こる場合がかなり広く見られることから，その現象の重要性も指摘されている(高山倫明1993)。また，同じく漢語を取り入れた韓国漢字語の結合時の音韻交替が，固有語層とどういう関係に立つかという視点も，日本語の現象を考える上で参考になるかもしれない。

4. 長母音化における漢語と和語

本節では，漢語が音韻変化にどのように関わるのか，すなわち，内的変化おける借用語層の振る舞いに関する問題について，長母音化を例に考える。

現代語の長母音 u:, o: 〈ウ段長音，オ段長音〉は，決して一筋の流れから形成されたものではないが，その中心的な現象に母音連続の融合がある。とくに「教養」「強盗」「集票」など漢語の長母音はその大部分がそれによって生じている。この変化に関わった母音連続は Vu の類型に属し，個々の融合とそれに伴なう合流とを図式化すると次のようになる。

《各母音連続の変化とそれに伴う合流》



横方向の相対的な位置関係は変化の時期を示すものではない。

以下に，母音連続の具体語例を示す（ou, jou は省略)。

-iu	漢語	ニウ（乳)，ジウ（十 <ジフ)，ヂウ（重)，
	和語	イウ（言ふ)，
-eu	漢語	セウ（少)，ケウ（教)，テウ（蝶 <テフ)，
	和語	ケウ（今日 <ケフ)，
-au	漢語	ガウ（号)，ザウ（雑 <ザフ)，タウ（唐)，光（クヮウ)，
	和語	アウギ（扇 <アフギ)，
-jau	漢語	リャウ（両)，キヤウ（経)，ギャウ（行)，(漢語のみ)

個々の変化の時期は厄介な問題であるが，少なくとも中世末期には今日とほぼ同じ状態に至っている[3)]。

いま，和語と漢語の違いから見ると，この変化が一律に生じているのは借用語である漢語のほうである。それに比べて和語では様相が一様でないという側面を持っている。高山(1992)は，日本語の内的動因という観点からこの変化を取り上げているが，その点についてあまり顧慮していない。

この変化に関わる大量の和語に，ハ行四段動詞の終止・連体形がある。しかしながら，長母音形への動きを見せながらも，その変化は完結せずに終わったらしい。現在，「払う」「もらう」「臭う」「拾う」のように母音連続形 -au, -ou が見られるが，それらは長母音形に完全に駆逐されなかったようである(岸本 1998)。なお，-eu を持つ動詞は事実上「酔う(ゑふ)」に限られ，一連のプロセスの中で -ou に合流し，他方，-iu に該当する「言う(いふ)」は長母音形 ju:になっている。

この終止・連体形に対し，動詞連用形ウ音便は形態音韻論的条件が異なっており，母音連続形は放棄され，「ハロータ，ハロタ（払った)」のように単母音化（いま長短は問わない）している。また，「暗う」「白う」のような，形容詞連用形ウ音便も母音連続形を保持していない[4)]。

さらに，「あふひ(葵)」「あふぐ(仰ぐ)」等は，aΦu > au > o: が期待されるにもかかわらず，awo の形をとり，長母音化とは袂を分っている。

このように和語の場合は，形態（音韻論）的条件が様々であり，そのために変化の流れが複雑になっている。これらのハ行動詞連用形ウ音便，終止・連

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

体形，形容詞連用形ウ音便を除くと，長母音化の生じた和語は数が限られ，とりわけ体言においてまとまりのある大きな語群は漢語である。むろん，漢語は，口頭での出現がまず期待できない語も多いので，それらは現実の話し言葉において形を変えていったわけではなく，母音連続形から長母音形への変化のパタンが類型的に，書記言語の形態に当てはめられていったと見られる。しかし，それを差し引いたとしても数の多さは注目すべきである。

漢語は，長さの点（1～2モーラ）でも音配列の点（特に2モーラ目のCV）でも，その形態が一定の型に収まる。漢音，呉音など，字音としての複層性が強調されがちの日本漢語ではあるが，形態面の多様性には乏しい。借用語にはしばしばこうしたパタン化が見られるが，漢語はとくにそれが顕著であり，そのために，長母音化が一律に生じえたのであろう。問題は，それがさらに和語の側にも関わっていないかどうかである。

4.1 体言における長母音化の本流

音韻論にとって漢語か和語かの違いはその来源が問題になるわけではなく，音配列の違いや形態音韻論的現象の違いが重要な意味を持つが，その違いは絶対的なものではない。

「昨日」「今日」は，長母音化を受けた和語の体言である。両語は，古くは「きの｜ふ」「け｜ふ」として捉えうる一組の語であったと推定される（語源はここで直接の問題でない）。これらはハ行子音の変化（3.節の①②）によってkinou, keuとなるが，この段階では，「き｜のう」「けう」のように捉える余地が生じていると考えられる。こうなると，韻律的な単位構成の面で漢語とタイプが同じであり，ちょうど「き｜のう」は二字漢語，「けう」は一字漢語に相当する形となる。

長母音化は，和語を基盤とした日本語内部の現象であるが，体言の場合，量的には漢語が本流となっており，和語のkinou, keuも漢語の流れの中に加わって，o:, jo:へと変化したのではないかと考えられる（その意味において，方言に見られる「キニョー」「キョー」の対は示唆的である）。もちろん，これら二語は和歌に用いられることから，伝統的には依然として大和言葉に入る語であっただろうが，一般の話者にとって，漢語と和語との境界は明瞭でなくなっていたと見られる（cf. 現代における外来語と和語）。しかも，その際，漢語が一方的に和語に歩み寄ったというわけではなさそうである。

「昨日」「今日」に対し，先に触れた「あふひ（葵）」，動詞「あふぐ（仰ぐ）」「たふる（倒れる）」等は長母音化の流れに加わっていない。おそらく「あふひ」はこれ以上分割不可の形態であり，また，「あふぐ」等は動詞としての形が「あふ｜ぐ」のような分割を許さなかったのかもしれない。これは「あふぐ」派生の名詞「あふぎ（扇）」が長母音化を経るのと対照的である（「あふ｜ぎ」）。動詞には「まうす（申す）」「まうく（設ける）」のような長母音化例もあるので，個々の例に対し，短兵急に一律の説明を押し通すべきではないが，長母音化に関しては，漢語と和語との相互関係から考えるべき問題が存在すると考えられる（なお，これらの例外を別の観点から柳田(1993)が取り扱う）。

ただし，「十（とお）」「氷」，動詞「通る」「凍る」，形容詞「多い」「遠い」等の，owoに由来する和語がo:に変わっていることには注意を払う必要がある。長母音の形成にはこれも大きな役割を果たしているからである（owoからo:について，亀井1966の付説を参照）。

4.2 漢語の質的変化

ともすれば，内的変化は，借用語層にとって「受身的な」現象であると考えられがちであるが，借用語自体の質的変容がそれに深く関与した可能性も無視できない。

本来，母音連続形は，たとえば「少将」-eu -jau (-jaũ),「明王」-jau -wau (-jaũ -waũ) のように，いかにも外国語らしい語感をもたらす要素であったと考えられる。とくに，二字漢語では母音連続が続いて現れうるが，和語にはそのような形が事実上ないため，なおさら異質な語形であったに違いない。そうした外来語的な特徴は，ある時期まではそれなりに重要性が高かったはずである。

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

Vuを持つ漢語形態素は所属数も多い。それが前掲図のように統合されると，二字漢語の音連続パタンの多様性も同時に失われるようになる。

今日の英語などとは異なり，漢語の場合は原語との密接な関係が早くに絶たれてしまっている。漢語が一般に広く社会の中で使われていくとともに，原語の持つ響きを彷彿とさせる要素の必要度は，徐々に低下していったと考えられる。そのような背景のもとに，多様な音連続パタンが次第に簡略化する方向をとったと推測される。その反映の一つが，漢語におけるVuの融合であるかもしれない。その流れが和語にいかに関わったかは今後に残された課題である。

5. その他／おわりに

漢語といえば，その定着は社会的に上層から下層への浸透という方向で捉えられやすい。そのため，語彙内部におけるその定着の過程を，高級語がより俗な領域へ徐々に移るというような，上から下への流れとして捉えがちである。

しかし，音配列の側面から和語との関係に目をやると，濁音が語頭に立つなど，和語の周辺域（オノマトペアに連続する）と共通する特徴を備えている。

たとえば，程度が甚だしいことを表す「がいに」のような副詞が，広い地域にわたって話し言葉の中に入り込んでいる。該当する字が必ずしも明らかでないものの，漢語起源と考えられている。また，「じゅくしがき」のジュクシは漢語「熟柿」に由来するが，「ずくし」等のように形を変えた場合も含め，これも各地の方言に広く使われている。さらに，「我慢」「雑草」「暴走」「全然」などにおいても，濁音が語頭に立つこととその意味とはもはや無関係でなかろう。漢語の日常語への浸透・定着に，こうした語形上の特徴が大きく関わっていることさえ考えられる。上から下への流れだけでなく，誤解を恐れずに言えば，漢語を俗の領域に引き摺り込む動きをも見逃すことができない。そこに音配列が深く関与しており，音韻論の問題は借用語の受容という社会的な側面とも大きく関わってくる。

近年の傾向として，一般音韻理論研究において，現代日本語に加え，漢語の問題を含めた日本語音韻史に関わる現象が対象に選ばれる機会が目立ってきている。例えば，本稿で扱った母音の融合だけをとっても，昨年開催されたMeikai Optimality Theory Workshop 2001（日本音韻論学会主催，8月30日）の発表で取り上げられ（Yamane & Tanaka 2001[5]），また，母音システムに関わるかなり根本的な議論(Kubozono 2001)においても取り上げられている。とりわけ，最適性理論が正面から言語音の有標性の問題を取り扱う以上，このような研究動向は今後拡大していくと見られる。

（付記）

成稿にあたり，立石浩一氏より有益なコメントをいただいた。記して感謝申し上げる。もちろん，その上での論の不備は筆者がその責めを負うものである。

〔注〕

1) なお，詳述は避けるが，オノマトペア（あるいはその一部）の語頭pが保持されたとすれば，③の場合（とくに強調のケース）と無関係ではあり得ないだろう。①②の変化とpとの関係については伊坂(1993)をも参照。

2) Fukazawa, Kitahara, and Ota (2001)は，昨年8月30日，明海大学で開催のOTワークショップ(MOT2001)での発表要旨。参考文献欄の同(to appear)にその内容が掲載予定。本号の立石論文が，その具体的内容に触れている。

3) この時期は(j)auと(j)ou（euを含む）との二類の合流が完全に終わっていない。ただし，前者はすでにau形を保持していない段階にある。

4) 形容詞連用形ウ音便は，関西およびその周辺において，

赤うなる　アカ（ー）ナル　アコ（ー）ナル
赤うて　　アカ（ー）テ　　アコ（ー）テ

のように，a(:)の形が見られる。これらの底流が中世まで遡るものなのかどうかに興味が向くが，しかし，村上謙(2002)は，かなり後の発生であるとする。同論文に依れば，変化の段階・時期，使用地域に関してかなり慎重な取り扱いが必要なようである。

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

5) Yamane & Tanaka (2001) は MOT2001 の発表要旨。その成果の一部は参考文献欄の同 (to appear) に掲載予定。

参考文献

伊坂淳一 (1993)「p音は「復活」したのか」『言語』22:2, 20–25.

小倉　肇 (1998)「サ行子音の歴史」『国語学』195, 左 42–55.

亀井　孝 (1966)「長夜十眠 —歳旦にちなみて—」『日本歴史』213.（1985『日本語のすがたとこころ(二) 亀井孝論文集4』東京：吉川弘文館. 419–432.）

岸本恵美 (1998)「ハ行四段動詞アウの発音」『国語国文』67:8, 1–16.

木田章義 (1989)「p音続考」『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』東京：桜楓社. 415–429.

小松英雄 (1971)『日本声調史論考』東京：風間書房.

高松政雄 (1990)「入声音と促音」『国語国文』59:3（1993『日本漢字音論考』東京：風間書房. 223–244.）

高山知明 (1992)「日本語における連接母音の長母音化 —その歴史的意味と発生の音声的条件—」『言語研究』101, 14–33.

高山倫明 (1993)「促音のあとの濁音」『島大国文』21, 48–55.

築島裕編 (1981)『金光明最勝王経音義』(「古辞書音義集成12」東京：汲古書院)

那須昭夫 (1996)「二字漢語における促音化現象 —最適性理論による分析」『音声学会会報』213, 27–39.

沼本克明 (1997)『日本漢字音の歴史的研究 —体系と表記をめぐって—』東京：汲古書院.

林　史典 (1992)「「ハ行転呼音」は何故「平安時代」に起こったか —日本語音韻史の視点と記述—」『国語と国文学』69:11, 110–119.

林　史典 (2001)「九世紀日本語の子音音価 —日本語音韻史における文献学的考察の意味と方法」『国語と国文学』78:4, 1–14.

濱田　敦 (1954)「ハ行の前の促音 —p音の発生—」『国語学』16（1983『続朝鮮資料による日本語研究』京都：臨川書店. 71–80.）

村上　謙 (2002)「近世後期以降の上方における形容詞ウ音便の変化形について」『国語と国文学』79:3, 55–68.

柳田征司 (1993)『室町時代語を通して見た日本語音韻史』東京：武蔵野書院.

ローレンス・ウェイン (1999)「ハ行音の前の促音—現代語における /Qh/—」『国語学』199, 左 16–27.

Fukazawa, Haruka, Mafuyu Kitahara and Mitsuhiko Ota (to appear) "Constraint-based Modelling of Split Phonological Systems," *Phonological Studies*（『音韻研究』）vol.5. 開拓社.

Kubozono, Haruo (2001) "On the markedness of diphthongs," *Kobe Papers in Linguistics* 3, 60-73.

Ladefoged, Peter and Ian Maddieson (1996) *The Sounds of the World's Languages.* Oxford, UK and Cambridge, Mass.:Blackwell.

Martinet, André (1952) "Function, structure, and sound change," *Word* 8, 1–32.

Yamane, Noriko and Shin-ichi Tanaka (to appear) "Gravitation and Reranking Algorithm: Toward a Theory of Diachronic Change in Grammar," *Phonological Studies*（『音韻研究』）vol.5. 開拓社

NII-Electronic Library Service